平成元年十二月一日発行（毎月一日発行）三一五号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-二一　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一（電話／〇二五-三七七-三一〇一）　編集／企画開発課（担当・広報統計係）　印刷／㈱博進堂　経費一部四五円

人 68 太極拳の普及を進める

筑波竜子さん
寺地団地・六十二歳

この十日に、中国ハルピン市から太極拳の高等コーチである張継修老師を招いて、太極拳の講習会を北部地区公民館で行うことになった。黒埼町では初めてのことである。この講習会の開催を準備したのが筑波さんで、現在、新潟市太極拳協会の副会長を務めている。

筑波さんが太極拳を始めたのは八年前。新潟市教育委員会の主催で昭和五十六年三月から三か月間開かれた太極拳の講習会に参加した時からだった。始めた動機は「中国に興味があったから」。当時、筑波さんの長男の昌之さんが中国へ語学留学に行っていたのである。また、筑波さんは十八歳の時、陸軍航空部隊の志願兵として台湾で終戦を迎え、十か月ほど捕虜生活を送った。その時、中国語の勉強をやらされたことも遠因かもしれない、とも。

「ちょうど私らが始めたころから、太極拳がブームになりかけていたんですね」と筑波さん。太極拳は「空手みたいな格闘技と思われがちですが、むしろ、健康法であり、護身術にもなるものと言ったほうがいいですね。中国では、太極拳で病気を治したという報告がいろいろ出ています。中にはガンを治したという話もあります。私はまゆつばものと思っていますが。」

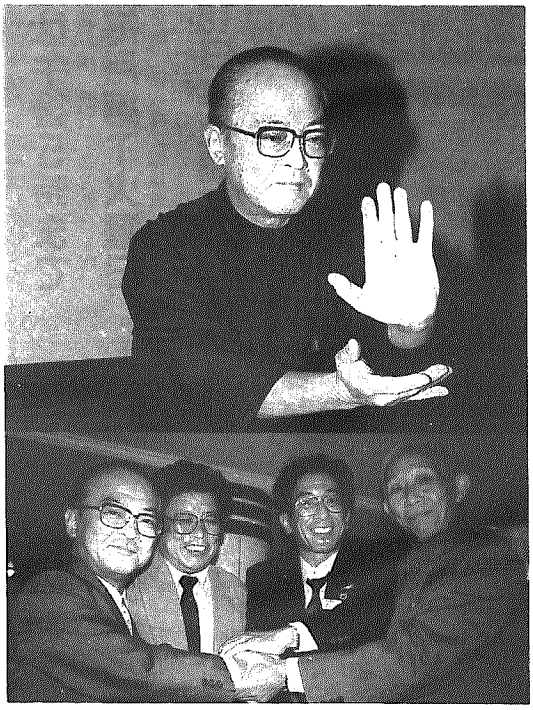
講習会が終わったあと、いっしょに講習を受けた仲間と同好会を結成し、毎週、練習。さらに、全国組織の呼びかけもあって六年前に「新潟市太極拳協会」が結成された。現在、協会には約三百人が参加、新潟市を中心に十数か所で練習をしている。

協会の副会長を務めていることについては「いっしょに始めた中では、まあ一番年をとっていたからでしょうか。縁の下の力持ちみたいな感じで、太極拳の普及と技術の向上を図っていきたいと思っています」

協会は四年ほど前から新潟市の姉妹都市である本場中国のハルピン市と交流を始めた。筑波さんはこれまで二回、ハルピンへ行った。この交流から、今回の講習会が実現したわけである。

「損得のない人間同士の赤裸々なつきあいですから、信頼感がすぐにあらわれてくる。こうした人たちと戦争したのか、と思うと…　平和につきあっていくことの大事さを実感しました」

※太極拳に興味のあるかたは筑波さん（☎二六五-四九八四）まで連絡を。



写真上／拳法着を着て練習する筑波さん。「今の私にとっては、競技とは関係なく自分の健康を保つためにやる健康法ですね」写真下／左から筑波さん、ハルピン市武術部長の呂世亮さん、新潟市太極拳協会理事長の友正慧さん（新潟市在住）、今回黒埼を訪れる張継修老師（1989年9月4日、ハルピン市で）

ほんの一冊

物語消費論

大塚　英志　著
（新曜社）

副題が「ビックリマンの神話学」とあるように、二年ほど前、全国の子供たちの間を席巻したビックリマンのほか、ドラクエⅢやマンガ、プロレスなどのサブカルチャーを材料に、現在の社会を透視しています。

大衆消費社会と言われていますが、私たちはモノを消費しているのではなく、物語を消費している、らしいのです。確かに、何かものを買うとき、私たちが思い浮べているのがどういう生活であるのかに気をつけてみれば、思い当たることがあるのではないでしょうか。著者はそれを一概に否定するのではなく、現状を提出することで未来に対する覚悟を迫っているようです。

（この本は北部地区公民館にあります）

〈人の動き〉

10月末日現在	（前月比）	〔前年同月比〕
人口	23,301 (+99)	〔+199〕
男	11,413 (+55)	〔+ 48〕
女	11,888 (+44)	〔+151〕
世帯	6,200 (+28)	〔+ 86〕

10月1日～末日

出生	27	転入	121
婚姻	12	転出	41
死亡	8		

編集室

十一月十八日（土木の日だそうです。なぜでしょう？）、新潟大学工学部で新潟の水辺を考える会の水辺の生態工学シンポジウムが開かれました。ウォーターフロント（水辺のことを行政方面では最近こう呼ぶ）ということばがトレンディ（時代の風潮にあった）になっているようなので、何が得るものがあるのでは、ということで行ってきました。講演される皆さんが熱心で、時間が足らず、最後に予定されていたディスカッションはやむなく中止。講演を聞いていた人の中に黒埼から来られた人もいて、モミガラのくん炭を使った雑排水の浄化（あとで出てくる新潟向陽高校の荒井六男先生の研究）を黒埼の住宅地でやってみては、という感想を述べておられました。▼では、編集子のとったメモから講演者の発言の中で印象的だったものをいくつか（もちろん、発言はこれだけではない）。まず、C・W・ニコルさん。自然保護は「愛情とお金とエネルギーとインテリジェンス（知性）があれば、できる」　横浜市公害研究所の森消和さん。川に手を加えて「出来上がった川がいい川なのかどうか？」「川は河川管理者の所有物ではなく、そこに住む人々のもので、河川管理者に管理を委託しているだけではないのか？」　新潟向陽高校の荒井六男先生はモミガラのくん炭で雑排水の浄化を研究されていますが、「お金をかければ、水はきれいにできる」「テムズ川に鮭が帰ってくるようになった。テムズ川にできて鳥屋野潟でできないわけがない。ただし、人まかせではできない」「これから生活が向上しますます水を使うようになるだろう。だから、水をきれいにできなければ、水を使う権利・資格はない」▼また、信州大学の桜井善雄教授の講演では、行政の側の水・水辺に対する姿勢、自然に対する姿勢が鋭く問われた、と感じました。▼得るところは大きかったが、それをどう生かすか。